カンボジアでの調査（近況報告）

雨期が終わった2008年11月からのカンボジアでの調査についてご紹介します。

まず12月１日に恒例のアンコール遺跡に関する国際会議が開催されました。この会議には研究所から４名が出席する予定でしたが、11月25日にバンコク国際空港が民主化要求デモによって占拠され、バンコク経由のタイ国際航空が全便欠航となりました。２名が出発できなくなり、善後策を協議した結果、今次の調査は中止しました。会議には先に現地入りしていた筆者を含む２名が参加しました。ハンガリーによるコー・ケー遺跡での修復開始、アプサラの新事務所開設など新しい話題の多い会議でした。

発掘調査は中止になりましたが、12月６日には、㈱タダノから贈呈されたラフテレーンクレーンが現地に到着し、西トップ寺院で待望の試運転をおこなうことができました。

２月には保存科学の調査チームが現地入りし調査をおこなうとともに、考古チームは西トップ寺院の発掘調査で出土した遺物の整理作業を開始しました。予想以上に中国陶磁が多く、優美な白磁合子や青磁の椀皿類が確認されています。中国陶磁が、どの時期にどれだけもたらされているかは不明で、共に出土した土器・陶器に関してもわからないことが多く、今後の整理作業が期待されます。また大量の瓦も注目されます。多くは須恵器のように堅く焼き締まり、表面には厚く緑釉がかかっており、ポストアンコール期の瓦研究にまたとない資料となることでしょう。

この事業は今、遺跡の状態の変化に伴って大きな転機にさしかかっています。今後も、研究所で慎重に検討を重ねながら進めていきたいと思っています。

（企画調整部　杉山 洋）

西トップ寺院出土瓦の調査